

Subject : **Japanese**Production of Courseware
e- Content for Post Graduate Courses

Paper No. 02 : 日本語学 (Japanese Linguistics)

Module 19 : 主題 (Topic of the Sentence)


**Development Team****Principal Investigator:** **Prof. Anita Khanna**
Jawaharlal Nehru University, New Delhi**Paper Coordinator:** **Prof. Prashant Pardeshi**
The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)**Content Writer:** **Prof. Hisashi Noda**
The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)**Content Reviewer:** **Prof. Shingo Imai**
University of Tsukuba

Japanese

Japanese Linguistics

主題 (Topic of the Sentence)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	主題 (Topic of the Sentence)
Module ID	JPN-P02-M19
Quadrant 1	E-Text

 **Pathshala**
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

主題 (Topic of the Sentence)

しゅだい
主題

もくてき もくてき おも じょし あらわ にほんご しゅだい の
目的：このモジュールの目的は、主に助詞「は」で表される日本語の主題について述
べることである。

しゅだい しゅご
1. 主題と主語

しゅだい ぶん なに の あらわ せいぶん にほんご しゅだい おも
主題とは、その文が何について述べるかを表す成分である。日本語では、主題は主
じょし あらわ たなか ぶん しゅだい
に助詞「は」によって表される。(1)では、「田中さんは」がこの文の主題になっ
てい
る。

たなか く
(1) 田中さんはあしたここに来る。

ぶん たなか まえ ぶんみやく で はな て き て いしき
この文は、「田中さん」が前の文脈に出てくるなどして、話し手と聞き手の意識に
ばあい たなか く の
ある場合に、「田中さん」について、「あしたここに来る」ことを述べるものである。

しゅだい しゅご ちが しゅご どうさ じょうたい しゅたい あらわ
主題は、主語とは違うものである。主語は、動作や状態の主体を表すものである。

たなか しゅだい どうじ しゅご たなか
(1) の「田中さんは」は主題であると同時に、主語でもある。(2) の「田中さんが」は

しゅご しゅだい
主語ではあるが、主題ではない。

(2) ^{たなか}田中^くさんがあしたここに^く来る。

この文は、「^{ぶん}田中^{たなか}さん」について、「あしたここに^く来る」ことを述べているのではない。「^{たなか}田中^くさんがあしたここに^く来る」というできごとを述べている。この文は、「^{たなか}田中^{まえ}さん」が前の文脈^{ぶんみやく}に出^でてきていなくても使^{つか}うことができる。

(3) の「^{たなか}田中^{しゅだい}さんは」は主題^{しゅご}ではあるが、主語^{しゅご}ではない。

(3) ^{たなか}田中^{わたし}さんは私^{さそ}が誘^{さそ}った。

この文は、「^{ぶん}前^{まえ}の文脈^{ぶんみやく}」に出^でてきた「^{たなか}田中^{わたし}さん」について、「^{わたし}私^{たなか}が（^{さそ}田中^{さそ}さんを）誘^{さそ}った」ことを述べている。

2. 主題^{しゅだい}になる成分^{せいぶん}

日本語^{にほんご}では、さまざま^{せいぶん}な成分^{しゅだい}が主題^{しゅだい}になることができる。もっとも主題^{しゅだい}になりやすいのは、主語^{しゅご}である。(4) では、主語^{しゅご}である「父^{ちち}が」が主題^{しゅだい}になっている。

(4) ^{ちち}父^{ほん}はこの本^かを買^かってくれた。

主語である「～が」に主題を表す「は」が付くときは、(4)のように、「～がは」にはならず、「～は」になる。

直接目的語も、主題になることがある。(5)では、直接目的語である「この本を」が主題になっている。

(5) この本は父が買ってくれた。

直接目的語である「～を」に主題を表す「は」が付くときは、(5)のように、「～をは」にはならず、「～は」になる。また、主題は基本的に文頭に置かれるので、「この本は」は「父が」より前に来る。

間接目的語も、主題になることがある。(6)では、間接目的語である「私に」が主題になっている。

(6) 私には父がこの本を買ってくれた。

間接目的語である「～に」に主題を表す「は」が付くときは、(6)のように、「～には」にはなるのが普通である。また、主題は基本的に文頭に置かれるので、「私には」は「父が」より前に来る。

そのほか、修飾成分である「～の」も主題になることがある。(7) では、名詞「鼻」

を修飾する成分である「象の」が主題になっている。

(7) 象は鼻が長い。

修飾成分である「～の」に主題を表す「は」が付くときは、(7) のように、「～のは」にはならず、「～は」になる。

また、述語を含んだ節も主題になることがある。(8) では、「この本を買ってくれた」という節が主題になっている。

(8) この本を買ってくれたのは父だ。

節に主題を表す「は」が付くときは、(8) のように、節を「の」で名詞化し、それに「～は」が付く。

3. 主題を持つ文と持たない文

日本語の文には、主題を持つ文と主題を持たない文がある。

しゅだい も ぶん
 主題を持つ文というのは、(9) や (10) のように、「この電車は」や「会長は」のよ
 しゅだい ふく ぶん ぶん ゆうだいぶん よ はんたんぶん
 うな主題を含んでいる文である。このような文は、「有題文」と呼ばれる。「判断文」
 よ
 と呼ばれることもある。

でんしゃ よこはま い
 (9) この電車は横浜に行きます。

かいちょう わたし
 (10) 会長は私です。

しゅだい あらわ せいぶん ふく ぶん しゅだい も
 「～は」という主題を表す成分を含んでいなくても、(11) のような文は主題を持つ
 ぶん かんが おな い み あらわ かいちょう
 文だと考えられる。(11) は (10) とほとんど同じ意味を表すため、(11) の「会長」は
 しゅだい かんが
 主題だと考えてよいからである。

わたし かいちょう
 (11) 私が会長です。

いっぽう しゅだい も ぶん しゅだい
 一方、主題を持たない文というのは、(12) や (13) のように、「～は」という主題を
 あらわ せいぶん ふく かいちょう しゅだい あらわ せいぶん ふく ぶん
 表す成分も含まず、(11) の「会長」のような主題を表す成分も含んでいない文であ
 ぶん むだいぶん よ げんしょうぶん よ
 る。このような文は、「無題文」と呼ばれる。「現象文」と呼ばれることもある。

(12) 富士山ふじさんが見えるよ。

(13) 先月せんげつ、駅前えきまえにスーパースーパーができた。

主題しゅだいを持たない文は、(12) のようにそのときその場で知覚ちかくしたことを表したり、

(13) のように過去かこに起きたできごとおを表すことが多い。

4. 主題しゅだいになりやすい名詞めいしと主題しゅだいにならない名詞めいし

主題しゅだいを持つ文で文の主題しゅだいになるのは、基本きほんてき的に名詞めいしである。たとえば、(14) では名詞めいし

「山田やまださん」が主題しゅだいになっている。

(14) 山田やまださんは大阪おおさかに住すんでいる。

名詞めいしではないものが主題しゅだいになるときは、それが名詞化めいしかされた上で主題しゅだいになる。たと

えば、(15) では形容詞けいようしを中心とした節ちゆうしん「いちばんよい」が「の」で名詞化めいしかされた上で

主題しゅだいになっている。

(15) いちばんよいのなには、何もしないことです。

めいし なか ぶん しゅだい

名詞の中で文の主題になりやすいのは、(16)や(17)のようなものである。

(16) ^{はなし げんば そんざい} 話の現場に存在するものを指す名詞 ^{さ めいし}

(17) ^{まえ ぶんみやく で} 前の文脈に出てきたものを指す名詞 ^{さ めいし}

「話の現場に存在するものを指す名詞」というのは、「私」や「あなた」のよう

に話の現場にいる人を指す名詞や、「これ」や「その服」のように話の現場にあるも

のを指す名詞である。たとえば、(18)では話の現場にいる人を指す「私」が主題にな

っている。(19)では話の現場にあるものを指す「その服」が主題になっている。

(18) ^{わたし} 私 ^{かえ} はもう帰ります。

(19) ^{ふく} その服 ^か はどこで買ったんですか。

「前の文脈に出てきたものを指す名詞」というのは、(20)の「その犬」のような

名詞である。(20)では、前の文に出てきた「犬」を指す名詞「その犬」が主題になっ

ている。

(20) わたし あね いぬ か その犬は もうすぐ 15 歳 になる そうだ。

そのほか、^{まえ ぶんみやく で}「前の文脈に出てきたものを指す名詞」に関連のある名詞も主題になりやすい。(21) では、^{まえ ぶん で}前の文に出てきた「犬」に関連のある名詞「(その犬の) 名前」が主題になっている。

(21) わたし あね いぬ か 名前は ブランだ。

このような主題になりやすい名詞とは逆に、^{しゅだい}文の主題にならない名詞もある。(22) ^{めいし}のような名詞である。

(22) ^{なに}「だれ」や「何」のような疑問を表す名詞

^{ぎもん あらわ めいし しゅだい}疑問を表す名詞は主題にならないので、(23) のように「だれ」を主題にした文は成り立たない。

(23) *だれは来なかったのですか。

(*のマークは非文法的または不自然であることを示す。)

5. 従属節の中の主題

主題はその文が何について述べるかを表す成分である。文の一部について、その部分が何について述べるのかを表すものではない。そのため、文の一部である従属節の中には主題は現れない。

たとえば、(24)のように従属節「大学に入る前」の中に主題「私は」がある文は成り立たない。

(24) *私は大学に入る前、兄はオーストラリアに留学していた。

(25)は従属節の中に主題「私は」があるように見えるかもしれない。しかし、この「私は」は文全体の主題である。「私は」は従属節「大学に入る前」だけの主題ではなく、「大学に入る前、北海道に住んでいた」という文全体の主題になっている。

(25) 私は大学に入る前、北海道に住んでいた。

ただし、従属節といっても、いろいろな種類がある。(26)の「～たら」のような従属節らしい従属節の中には主題は現れない。

(26) ^{やまだ} ^き ^{わたし} ^し
山田さんが来たら, 私に知らせてください。

しかし, (27) のような従属節「^{じゅうぞくせつ} ^{はたら} ^{ぶん} ^{ちか} ^{せいしつ} ^ももう働いているが」は文に近い性質を持っている。

(28) のように従属節と主文を分けて 2 文にすることができるからである。

(27) ^{あに} ^{はたら} ^{きゅうりょう} ^{やす} ^{こま}
 兄はもう働いているが, 給料が安くて困っている。

(28) ^{あに} ^{はたら} ^{きゅうりょう} ^{やす} ^{こま}
 兄はもう働いている。しかし, 給料が安くて困っている。

このような文に近い性質を持った従属節の中には主題が現れることがある。たとえば, (29) では主題「^{しゅだい} ^{あに} ^{じゅうぞくせつ} ^{はたら} ^{なか}兄は」は従属節「^{ぶん} ^{ちか} ^{せいしつ} ^も ^{じゅうぞくせつ} ^{なか} ^{しゅだい} ^{あらわ}もう働いているが」の中のものである。

「^{わたし} ^{しゅぶん} ^{がくせい} ^{しゅだい}私は」は主文「^{わたし} ^{しゅぶん} ^{がくせい} ^{しゅだい}まだ学生だ」の主題である。

(29) ^{あに} ^{はたら} ^{わたし} ^{がくせい}
兄はもう働いているが, 私はまだ学生だ。

キーワード:

^{しゅだい} ^{しゅご} ^{ゆうだいぶん} ^{むだいぶん} ^{じゅうぞくせつ}
 主題 主語 「は」 有題文 無題文 従属節
